

医師-患者の信頼関係はどのように構築されるか

—モンゴル人医師の語りを通じて—

首都大学東京大学院 包暁蘭

1 目的

この報告の目的は、モンゴルにおける医師-患者関係は、いかに構築されているかを分析するものである。モンゴル医学は 2000 年の歴史を持つ、モンゴル民族の文化遺産となる伝統的医学である。モンゴル医学は、西洋医学、東洋医学に並び第三の医学である（ジグムド, 1991）。診断には、患者から病状を聞く「問診」、脈を診る「触診」、眼・舌・皮膚・尿などを診る「望診」を組み合わせた方法を用いるが、特に「触診」を重視する医療である。

今日、医療の専門化や患者の権利意識の増大により医師と患者の関係が指摘されるようになっている。日本では、診療コミュニケーション、医師-患者の信頼関係の重要性を取り上げられる研究が蓄積されている（西垣, 2005）。しかし、モンゴルでは、日本のような先進国と比べて医療技術も発展途上である上に、医師と患者関係についても取り上げることが少ない。そのようなモンゴルにおける医師と患者関係はどのように構築されているかを分析する。

2 方法

分析の対象とするのは、内モンゴル自治区（フフホト）の医療機関に勤務するモンゴル人内科医五名である。医療現場、診察の場面での診察方法、患者とのやり取りや患者の医師を選ぶ方法について聞き取り調査から得られたデータを用いて分析する。

3 考察

分析の結果、モンゴルでは患者が医師を選ぶとき、その医師に対する世間の評判（大多数は誰かの紹介口コミ）が大きく影響される。初診の際、患者は事前に聞いた評判の良さから医師に信頼をよせている。その上、医師は更なる信頼を獲得するために、患者の脈を通じて患者の症状を説明し、治療を行う。そのため、モンゴルにおける医師と患者の信頼関係は、診察場面で医師が患者の脈を診て患者が自覚する症状をあてることによって構築されていると考えられる。モンゴル医療における疾病に対する判断は、西洋医学における疾病の判断とは大きく異なる。したがって、その中で構築される医師-患者関係も相違がある。

4 結論

「医師が患者の病状を説明し患者の不安を取り除き、治療法を提示すれば、患者は治療に意欲的になる」という西洋医学的な「常識」は、モンゴルにおける医療にも共通する。しかし、モンゴルにおける医師と患者の信頼関係の独自性は、診察方法、脈を診ることにあらわれている。日本など先進国では、血液検査、機械検査の結果より患者の症状を判断し治療を行うのに対し、モンゴルでは、患者の症状を患者の脈から判断し治療を行う。それが信頼関係を構築に当たって非常に大きな影響を与える。西洋医学のような専門家として尊敬される医療像は、モンゴル医学における医師患者関係によって相対化することができると考えられる。

文献

ソロングト・バ・ジグムド, 1991, 「モンゴル医学史」 ジュルンガ・竹中良二訳, 農文協
西垣悦代, 2005, 「関係性の視点からみる日本の医師患者コミュニケーション」『日本保健医療行動学会学年報』 20:157-172.